

一般の部 特別賞

「いってきます。」時刻は午前六時過ぎ。父はまだ眠い目を擦る僕にそう声をかけ、シワ一つないスーツを着て家を出ていった。僕の父は普段、無口で仕事の話をしない。けれど、家族の誰よりも早く家を出て、誰よりも遅く家に帰ってくる。

僕が小さい頃、父が一度だけ仕事の話をしたことがある。小学校の宿題で親の仕事をインタビューしたときだ。父は仕事のやりがい話をしたあと、「朝が怖いくらい行きたくないこともあるよ。」と珍しく弱音を吐いた。知らなかった。あの無口な父がそんなことを考えていたなんて。僕は父をねぎらうために毎年花を贈ることに決めた。「感謝」の花言葉がある白いダリアだ。嬉しそうに受け取る父を見て僕も嬉しくなる。恥ずかしくて言えない思いは花に込めて伝えてしまえばいいのだ。

お父さんへ。今日は恒例のお花じゃなくて、文字で伝えます。いつもお仕事頑張ってくれてありがとう。お父さんがお父さんで本当に良かったです。

三重県三重郡朝日町

もりやま いつき
森山 一輝さん